

すべてが財産



小澤弥生

UBE(株)みらい技術研究所
[290-0045] 市原市五井南海岸8-1
博士(学術).
専門は高分子分析.
yayoi.ozawa@ube.com
<https://www.ube.co.jp/>

入社から14年が経過して、私を取り巻く環境は大きく変化したと感じる。目に見えて社内の女性の方が増えただけでなく、その女性の働き方も多様化した。育児に励みつつ仕事を生き生きと頑張る方、バリバリのキャリアウーマンを絵にかいたような方、みなさんそれぞれ素敵だなぁ、といつも惚れ惚れと見ている。そんな中、私からは「女性の活躍」ではなく、女性が生き生きと働く際に気になる「病氣」を話題に挙げさせていただくことにした。

2021年8月にステージⅡの乳がんと診断され、同年9月に手術(がんの切除と腋窩リンパ節郭清)、その後抗がん剤治療(EC療法)、翌年1月からホルモン療法と、あれよあれよという間に一通りの治療を受けた。コントロールドリリース製剤のお世話になることで、現在は月1回の通院のみで体調を維持できている。技術の進歩に支えられ、仕事を続けることができていることに感謝している。

がんが発覚した際に、まず頭をよぎったのは「今の仕事を続けられるだろうか、治療後も今の職場に戻れるだろうか」ということだった。最近では社内外で「治療と仕事の両立」に向けた支援が手厚いことは知っていたが、がんで研究職を続けている例は身近におらず不安があった。実際どうだったかと言うと積立休暇制度や、フレックスやテレワーク等の制度を組み合わせることで自分に合った無理のない復帰を果たすことができた。現在も仕事に大きな影響はなく、罹患前と同じ職場で変わらず仕事を続けている。制度を有効に利用することを許してくれた上司や同僚への感謝は言葉では言い尽くせない。

手術にお金がかかるのは予想していたが、これほどまでに「診断」に時間と費用がかかるとは予想していなかった。世の中、こんなにも情報にあふれているのに、である。

悪性であると診断がつくまで、マンモグラフィ、エコー検査、CT、MRI等、正確な診断をつけるためにさまざまな検査を受けたが、測定装置ごとに観察される腫瘍の大きさが微妙に異なる上に、「最終的には体にメスを入れて腫瘍細胞を直接見なければわからない」ということが、まだまだこんなにも多いのかと驚いた。

リンパ節への転移の有無も、明らかになったのは手術によってであった。

そもそも私の場合、なかなかがんに気づけなかった。2020年7月に自治体の定期健診を受けた際には、がんに気づけなかった。苦痛に耐えながらマンモグラフィを撮影し、がんがあれば白く映るはずの画像はほぼ真っ白に見えた(がんの有無にかかわらず真っ白に写る人も一定数いるらしい)。撮影担当の方から「大丈夫です」と言われたが、「そんな真っ白な画像の中にたとえ白くがんが写っていたとしても、判別できないのでは?」と不安を覚え、「大丈夫」の意味が気になったのを憶えている。そして案の定、届いた結果は「今回の結果では、問題となる異常を認めませんでした」だった。

そんなとき偶然、自費診療のがん検診に補助が出る社内制度を知った。乳がんのMRI検査は2~3万円程度かかるため、通常ならばケチな私は二の足を踏むところだが、このときは補助のおかげで迷わなかった。2021年4月に受けたMRIの結果は「8 mm程度の結節を認めます」。測定機器が違えば得られる画像は大きく異なり、素人の私が見ても「大丈夫、見えてる、信じよう」と思えるデータがそこにあった。

つくづく、運が良かったと思う。最近では自己触診などで乳がんが発見されることも多いとされるが、私は深い位置(胸筋に近い位置)であったため、自覚症状はまるでなく、あるときマンモグラフィのデータに疑問をもちMRI検査を受けていなければ、今もがんの存在に気づけず、手遅れになっていただろうと思ひ、ぞっとする。

10年の歳月を大学で過ごし、会社では樹脂の研究7年、分析業務2年半、企画業務1年、医薬品工場での品質管理2年、その後研究所に戻って現在に至る。大学で学んだことや専門性を直接活かした仕事を続けてきたわけではないが、大学で過ごした時間も会社のさまざまな部署での経験もすべて、決して無駄ではなかったと言い切れる。学生時代や会社を通じて行ってきた「データを自分で読む」という訓練に、命を救われたと思っている(言い過ぎかもしれないが)。これからも、これまでの経験が思わぬ場面で効果を発揮することを楽しみに、仕事と私事に取り組んでゆこうと思う。